



テレビ vs 映画 境界を超え、オンライン時代に備えよ!

ドキュメンタリーのゆくえ

～独立映画とTVの秀作上映、原一男との闘論～

2010年
12月12日 (日)
11:00～19:30
 一般2000円・学生1000円
 (定員 160名)

なぜドキュメンタリーにおいて、テレビと映画の垣根はかくも高いのか。
 ドキュメンタリー映画が、テレビで放映が難しい理由は何か？
 ユーチューブに代表されるオンラインメディアの勃興に、ドキュメンタリストは
 どう向き合うべきか？
 番組制作の裏側に迫り、尋常でない(?)映画制作の現場を告白する。
 テレビディレクターと独立映画監督、デジタルメディアに挑むジャーナリストが、
 ドキュメンタリーの未来と可能性、そして共闘を考え徹底討論。
 秀作6本を一挙上映、ドキュメンタリーにどっぷり浸かる総8時間の長丁場。

【司会・進行】



原一男 (映画監督)

『ゆきゆきて、神軍』(1987年)でベルリン国際映画祭
 祭りが賞、パリ国際ドキュメンタリー映画祭グラン
 プリ受賞。「全身小説家」(1994年・キネマ旬報
 ベストテン第1位毎日映画賞大賞)ほか多数。
 「CINEMA 塾」を主宰し、次世代の人材育成に力を
 注いでいる。



石丸次郎 (ジャーナリスト)

1962年大阪出身。アジアプレス大阪事務所代表。
 02年より北朝鮮内部にジャーナリストを育成する活動
 を開始。「北朝鮮内部から通信・リムジンガン」編集
 発行人。おもなテレビ作品に「北朝鮮に帰ったジュナ」
 (NHK 2010年)など。

【プログラム】

第1部:TV局の秀作上映と討論 11:00～14:30

RKK 熊本放送・宮脇利充氏の作品 2本の上映

① 迷走 ～日本初!大規模ダムの撤去～ (25分) ②「路木ダムから見える風景」(25分)

RKB 毎日放送・阿佐部伸一氏の作品 2本の上映

①「私は統合失調症 ～精神障害者の社会復帰～」(25分)

②「幸せ求めて国際結婚～中国お見合いツアー～」(25分)

トーク: 宮脇 VS 阿佐部 VS 原 VS 石丸

----- 昼休憩 -----

第2部:独立映画監督の作品上映と討論 15:00～19:30

長岡野亜監督作品「ほんがら」(90分)

太田直子監督作品「月あかりの下で～ある定時制高校の記憶～」抜粋上映(60分) 17:00～

トーク: 宮脇 VS 阿佐部 VS 原 VS 長岡 VS 太田 VS 石丸

【主催】ジャーナリズム・フェスタ 2010 実行委員会

【協賛】アジアプレス、新聞うずみ火、自由ジャーナリストクラブ (JCL)、DAYS・JAPAN関西サポーターズクラブ

【場所】大阪市北区曽根崎新地 2-5-23

ビジュアルアーツ専門学校 ホール

■ アクセス・地図

JR大阪駅から徒歩約10分

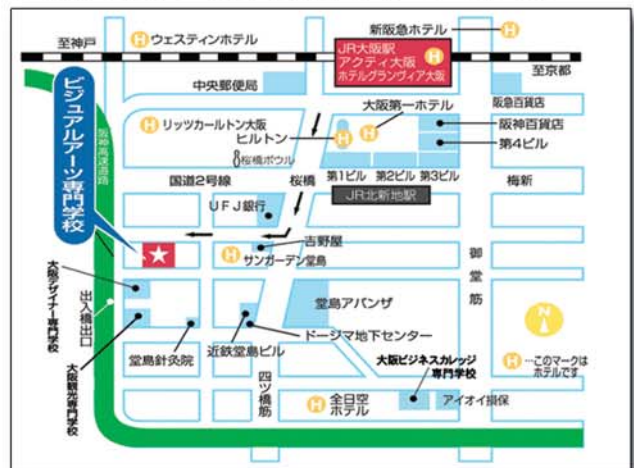
京阪 渡辺橋駅から徒歩約7分

JR大阪駅桜橋口から中央郵便局方面へ。

四ツ橋筋桜橋交差点を通過。

三菱東京UFJ銀行を右折し、直進。

南海部品の角を左折し、すぐ右折。100m直進



ドキュメンタリーのゆくえ

民放においてドキュメンタリー番組の衰退が叫ばれて久しい。とりわけ東京・大阪のキー局で、ドキュメンタリーは端っこに追いやられている感否めない。放送時間は、ほとんどが深夜12～4時ごろ。制作費は一本40万円という場合もあるという。

独立系のドキュメンタリー映画はどうか？制作の現場は、やはり年々厳しさを増している。制作資金の調達に苦勞するのは、過去に傑作を世に送り出した名監督たちも同じ。作品作りのために借金をするのは珍しいことではない。テレビは駄目なのか？映画界がだらしがないのか？

だがどっこい、秀作は生み出されている。テレビでは、地方局のディレクターたちが低予算の中でも奮闘し、質の高い作品を世に送り出している。

NHKを除けば、近年ギャラクシー賞を受賞したドキュメンタリー作品の多くは、地方局で制作されている。

ドキュメンタリー映画では、カメラの小型化、高画質化、価格低下によって、非常に多様な人たちがドキュメンタリー制作に挑むようになり、質の高い作品が作り続けられている。

一方で、日本のドキュメンタリーの世界は、かつて今も、テレビと独立映画の間には、高い壁がそびえ立っている。ドキュメンタリー映画がテレビで放映されることは稀だし、テレビの名作は、劇場ではほとんど見られる機会はない。また、番組の予算がいくらなのか、映画はどのようにして作られているのかなど、テレビと独立映画の作り手は、互いの制作の手法や現場をほとんど知らないでいる。

経済環境が厳しさを増す中、テレビと映画の課題は多くの部分で重なっている。ドキュメンタリーの「力と面白さ」を伝え、作品を世に送り出し続けるためには、発表する機会と作品の質を、どう獲得・確保していくかが喫緊のテーマである。そして、こんな時代に急成長を遂げているのが、ユーチューブに代表されるオンライン動画メディアである。五年後、オンラインメディアの増殖は、テレビと映画の在り方を大きく変えてしまっているかもしれない。

テレビと映画の壁を越えて、ドキュメンタリストは共闘していけるか。デジタルメディアの勃興にどう向き合っていくか。テレビディレクターと独立映画監督、デジタルメディアに挑むジャーナリストが徹底討論する。

司会・進行 原一男(映画監督) 石丸次郎(アジアプレス)

宮脇利充

(みやわき としみつ)



1984年、熊本放送にアナウンサーとして入社後、ディレクター、報道部でのキャスター等を務め、数々のドキュメンタリー番組を制作。現在は、報道部デスク。

①「迷走 ～日本初!大規模ダムの撤去～」 2010年制作 3月放映 25分

1954年に熊本県の球磨川に建設された荒瀬ダム。県の説明とは裏腹に、洪水や漁獲量減等、甚大な被害を生み出した。長期間、改善を求めてきた地域住民たち。2010年2月、ようやく大規模ダムとしては、日本初の撤去が決まる。なぜ、撤去決定までに膨大な時間を要したのか。ドキュメンタリーはその原因を追及していく。

②「路木ダムから見える風景」 2010年制作 10月放映 25分

2010年6月、熊本県天草市の路木川に、治水、利水目的のダム建設が始まった。必要ない、との専門家や市民グループの指摘がありながら、なぜ、市や町は建設を押し進めるのか。財政難に苦しむ地方自治体にとって、国の補助金をめぐる死活問題ともいえる実態も垣間見えてくる。ダム建設から見えてくる風景とは…。

阿佐部 伸一

(あさべ しんいち)



大阪芸術大学写真学科卒業。毎日新聞社・写真記者、フリーランスのフォトジャーナリストとして活動後、

1998年RKB毎日放送に入社。ディレクターとしてドキュメンタリー番組の制作に当たっている。兵庫県芦屋市出身、53歳。

①『幸せ求めて国際結婚 ～中国お見合いツアー～』 2004年制作 2004年5月放送 (25分)

結婚相談所では希望のタイプは無理と絶望した日本人男性(55)は、国際結婚を思い立つ。斡旋業者の手を借り、人生初の海外旅行で訪中。写真で選んだ女性を含め、20代の中国人女性14人と面談すると、即日婚約した。お見合いツアー密着ドキュメント。

②『私は統合失調症 ～精神障害者の社会復帰～』 2009年制作 2009年3月放映 (25分)

精神分裂病への差別をなくすべく、その病名は7年前「統合失調症」に。だが、殆ど何も変わっていない。夫婦共にこの障害と闘う和田幸之さん(50)と智子さん(52)が、顔出して取材に応じたのは「社会の役に立て、何かが変われば」という思いからだ。

長岡野亜

(ながおか のあ)



京都生まれ。映画監督・原一男氏の主宰する「CINEMA塾」に参加し、『かけがえの前進』(2002)を演出。

2008年に完成した『ほんがら』は第14回平和・協同ジャーナリスト基金・審査委員特別賞(新人賞)などを受賞し、山形国際ドキュメンタリー映画祭2009で上映された。2008年から、滋賀県で市民参加型映画づくり「遺言 YUI-GON」プロジェクトを進行中。

「ほんがら」 2008年製作 90分

滋賀県、近江八幡市島町。約60世帯の3割を高齢者がしめる農村集落。村の再生のために、老人クラブのメンバーたちが、島町伝統の「ほんがら松明」を復活させることを決意した。胸躍る祭り本番までの、地域再生ものがたり。

太田直子

(おた なおこ)



1964年東京生まれ。高校非常勤講師や書籍編集などの仕事を経て、高岩仁監督の『教えられなかった戦争～マレー半島編～』(映像文化協会・1992)に演出助手として関わったのを機に映像制作を志す。主な演出作品に『俺は母ちゃんを殺した』(NNNドキュメント05)、『ページセー～1461日の記憶～』(日本テレビ・2007)など。

「月あかりの下で～ある定時制高校の記憶～」 抜粋上映(約60分・2010年・製作配給グループ現代)

舞台は埼玉県立浦和商業高校定時制課程。新入生の9割が不登校経験者というあるクラスの入学から卒業までの四年間にカメラが寄り添い、学校を居場所として育つ生徒たちと教師の姿を記録したドキュメンタリー。彼らにとって学校は、「生きる希望をくれた場所」だった。